

主 題：感謝の人生・実践編：兄弟姉妹に対して6

聖書箇所：ローマ人への手紙 12章12節

パウロは私たちに「絶えず祈りに励みなさい」と言いました。もうすでに見て来たように「祈りの人となりなさい」と彼は私たちに命じるのです。そこで、私たちはなぜ「祈りの人」になることが重要なのかというその理由を見ています。

☆愛の実践

8. 絶えず祈りに励みなさい 12節

A. 祈りの重要性： どうして祈りの人になることが重要なのか？四つのこと

1. 主の命令だから
2. 霊的成長に不可欠だから

今日、三つ目に見たいことは、

3. 神の働きを為すための力だから

私たちが主のみこころを為して行くために、私たちに主が命じておられることを実践して行くためには、主の助けが必要です。感謝なことに、その助けはもうすでに備えられています。私たちがそれを主からいただくなら、主が命じていることを実践できると、みことばは確かにそのように教えています。実は、ここに大切な信仰生活のカギ、秘訣があります。パウロは確かに私たちにこのようなことを命じましたが、聖書を見ると、信仰の勇者たちはそのように生きています。

a) モーセのケース

モーセはエジプトで奴隷であったイスラエルの民を解放し、約束の地へ—現在のイスラエルですが—に民を連れ上って来なさいという、大変な務めを主からいただきました。その命令を受けたとき、モーセは次のように主に申し出ています。出エジプト記3：11「モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行ってイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」。この質問はよく分かります。神はなぜ大変なことをこんな私に命じるのですか？「私はいったい何者なのでしょう。」、そのような大それた命令を実践することは私には不可能なことですと、そのように思っても仕方がなかったでしょう。というのは、その働きがいかに大きなことかをモーセはよく知っていたからです。

・主の約束

そこで主はモーセに対してこのように言われました。3：12「神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」と、ここに二つのしるしが記されています。神はモーセに二つの約束を与えるのです。モーセを安心させるために、モーセに確信をもたせるために。

(1) 主なる神がともにいてくださる

一つは、「わたしはあなたとともにいる」という約束です。モーセは主なる神がともにいてくださるという非常に心強い約束を神ご自身からいただくのです。

(2) このホレブ山へ連れ帰ってくる

二目のしるしは後半に出て来ます。「あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」と、イスラエルの民を率いてこのホレブの山に戻って来るという約束です。

このようなすばらしい約束を神から直接いただいたモーセですが、今から民のところに出て行って、このメッセージを伝えるときに、いろいろな不安が彼の脳裏をよぎりました。「私がそんなことを伝えても彼らは聞き入れないでしょう」と。人々の反応についていろんなことを考えて不安を感じたモーセは、神に対して消極的な応答を為しています。この出エジプト記4章10節を見るとそのことが記されています。「モーセは主に申し上げた。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」、これもよく分かります。このようなモーセに対して主は次のように語られました。11-12節（新改訳第二版には差別用語があるので第三版を見ます）「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。：12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」と、このように神はモーセに約束を与えました。何を語っていいのかわかりませんと不安がっているモーセに対して「心配いらぬ、あなたの口は私が与えたものだ。あなたの目は私が与えたのだ。だから、行きなさい。わたしが語るべきことばを与えましょう。」と。どこかでこれと同じようなことを聞いたことはありませんか？

新約聖書の中で主イエス・キリストご自身がこのように言われたことが記されています。マタイの福音書 10 : 19 - 20 「人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。:20 というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。」、新約の時には主は同じことを言っておられます。私たちが人々の前に立って何を話せばいいのか分からないとき主は言われます。「心配しなくていい、わたしが語るべきことばを与えるから」と。主はモーセにもこのようなすばらしい約束を与えました。

そこでこのように言えます。あなたのことを知っておられる主は、あなたにできることを命じられる。私たちは主の助けをいただきながら従うことです。このようにして私たち信仰者は生きて行くのです。今、確かに、私たちはモーセと主のやりとりを見て来ました。主がモーセに教えようとしたことは「あなたがわたしの命じることを実践していくために、わたしはあなたに助けを与える」です。主はモーセに「自分の力で頑張ってみなさい」とは言われませんでした。「わたしが助ける」と言われたのです。

b) ヨシュアのケース

モーセの後継者だったヨシュアの歩みを見ても、彼自身も主の助けをいただきながら歩んだことが明らかです。申命記 31 : 23 にはこのように記されています。「ついで主は、ヌンの子ヨシュアに命じて言われた。「強くあれ。雄々しくあれ。あなたはイスラエル人を、わたしが彼らに誓った地に導き入れなければならないのだ。わたしが、あなたとともにいる。」、今、モーセに対する主のメッセージを見ました。「わたしがあなたとともにいるから心配しなくていい。わたしが助けるのだから。」と。主は同じように、このヨシュアに対してもそのようにお語りになりました。

ヨシュア記 1 章では、主がヨシュアに語ったことがもっと詳しく記されています。1 : 6 「強くあれ。雄々しくあれ。わたしが彼らに与えるとその先祖たちに誓った地を、あなたは、この民に継がせなければならないからだ。」、1 : 7 「ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。これを離れて右にも左にもそれではならない。それは、あなたが行く所ではどこでも、あなたが栄えるためである。」、1 : 9 「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」、今、敢えてその箇所だけを読みましたが、主はヨシュアに対しても「強くありなさい、雄々しくありなさい」ということを繰り返し教えられました。「強くあれ」というこの動詞の命令は「勇敢な、勇ましい、自信のある、確信して」などという意味があります。「雄々しくあれ」も同じように動詞の命令ですが、「強い」ということで、特に個人の敵に対して使われます。ですから、ここで主が繰り返されたことは、相手がだれであれ、あなたは勇敢でなければならない、あなたは自信をもって確信をもって歩み続けなければいけないということです。もちろん、この確信、自信は自分の力に対するもの、知恵に対するものでないことは明らかです。神に信頼を置いて、神に確信を置いて歩んで行きなさいということです。

ヨシュアは神から大きなチャレンジを受けました。そして、その際に、主なる神がヨシュアに命じたことは「ヨシュアよ、わたしの言っていることばに信頼を置きなさい。わたしが言ったことを信じなさい。ヨシュアよ、わたしを信じなさい。わたしに信頼を置いてわたしの後をついて来なさい。」です。神の助けがヨシュアには必要でした。というのは、この後、ヨシュアに命じられたことは大変なことだったからです。もちろん、この後、カナン地に入ってからカナン地を征服していくのですが、ご存じのように、

・ 4 章 ヨルダン川を渡る

ヨシュア記 4 章を見ると、ヨシュアが率いるこのイスラエルの軍勢はそのヨルダン川を渡っていきます。どのようにして渡ったか思い出してください。紅海を渡ったときと同じように、彼らはヨルダン川の乾いたところを渡るのです。神が川を堰き止められたので、民は乾いたところを渡って行きました。このような大きなみわざを主が為されたのです。川の辺に立って、ヨシュアにはどうしようかという思いがあったかもしれませんが、しかし、神が導いたとき、神を信頼したときに神のみこころが為されました。人間的に見て不可能と思えることを神は為されたのです。不可能のない神です。言われたことを必ず守り実現なさる神です。そのみわざが為されたのです。

・ 6 章 エリコでの戦い

そして、ご存じのように、ヨルダン川を渡ったイスラエルの民は、難攻不落のエリコにやって来ます。もし、神が数百万のイスラエルの民に「このような作戦をもってエリコの城壁を破壊しなさい」と言われたなら、違った結果があったでしょう。しかし、神はここで人間の力や人間の策略を用いませんでした。神が為されたことは、人間的に見て絶対に城壁が壊れないと思える方法をお用いになりました。そ

れは城壁の周りをぐるぐる回るだけでした。そして、彼らが叫び声を上げたときに城壁が崩れたのです。ここでも、神はご自分がいかに力のある神であるか、神がみこころを為すために人間の助けなど全く必要としないことを明らかに示されたのです。そして、ヨシユアはイスラエルの民を率いてカナンの地に入って行くのです。

・ 7-8章 アイでの戦い

残念なことが起こりました。アイという町でイスラエルは敵に敗北しました。どうしてか？その原因を調べて見ると、自分たちの仲間の一人アカンが主の前に罪を犯したことが明らかになりました。主がそのことを示され、彼らは除かれました。そして、8章を見ると、このアイはイスラエルによって滅ぼされます。それを聞いたカナンの王たちは非常な恐れを抱く訳です。

・ 10章 エモリ人の五人の王とのギブオンでの戦い

そこで、10章には、エモリ人の五人の王が集まって来て戦いが始まることが記されています。ギブオンでの戦いです。そのときに、このヨシユアが主の前に願ったことは「太陽よ動くな。月も動くな」というものでした。10：12「主がエモリ人をイスラエル人の前に渡したその日、ヨシユアは主に語り、イスラエルの見ている前で言った。「日よ。ギブオンの上で動くな。月よ。アヤロンの谷で。」と、このような祈りをしたときに、太陽は動かず月はとどまると記されています。

私たちの理解を超えたわざを神は為されたのです。私たちには絶対に理解できないことを神は為されたのです。川を堰き止め、乾いたところへ導き、人間の手によっては崩すことができないと信じられていたエリコの城壁を、ただぐるぐる回り叫ぶことによって滅ぼされました。そして、太陽がとどまり月が出て来なかったと言います。そのような天体までも支配され導かれた神、ヨシユアはこれらのことを通して大切なことを学んでいくのです。

そして、このようなことを実践する前に、彼は神からすばらしいメッセージを聞くことが必要でした。今、私たちが見てきたように「強くあれ、雄々しくあれ。ヨシユアよ、わたしに確信を置きなさい。わたしを信頼しなさい。わたしは神だ。わたしは全能の神だ。わたしの言うことを信じなさい。そして、わたしが命じることをやりなさい。」と、その確信に基づいてヨシユアは民を導き、このようなわざを通して神ご自身が人々のご自分を明らかにされたのです。そして、彼らは北カナンを征服していくのです。このヨシユア記の最後23章を見ると、ヨシユアはイスラエルの民の中の長老たちやリーダーたちにメッセージをしています。そして、24章になると、ヨシユアは民に対してメッセージを与えるのです。長老たちと群れのリーダーたちに与えたそのメッセージは五つあります。これらのことを決して忘れてはいけないうと、このように語ります。

◎ヨシユアから民の長老、リーダーへのメッセージ

・ 23：3 あなたがたの主があなたがたに代わって戦ったことを忘れない

「あなたがたは、あなたがたの神、主が、あなたがたのために、これらすべての国々に行ったをことごとくを見た。あなたがたのために戦ったのは、あなたがたの神、主だからである。」。あなたがたのために戦ったのはあなたがたの神、主であったと、ヨシユアはリーダーたちに告げました。我々は多くの敵に勝利して来たが、それは私たちの力ではない、私たちの神が私たちに変わって戦ってくださったのだ。だから、勝利を得ることができた、そのことを忘れてはいけないうと云うのです。我々に力があるのではなくて、我々の神に力があること、それを忘れてはならないと云うのです。

・ 23：6, 7 神の教えに従い続けること

「あなたがたは、モーセの律法の書にしるされていることを、ことごとく断固として守り行ない、そこから右にも左にもそれではならない。：7 あなたがたは、これらの国民、あなたがたの中に残っているこれらの国民と交わってはならない。彼らの神々の名を口にしてはならない。それらによって誓ってはならない。それらに仕えてはならない。それらを拝んではならない。」、これらを守らないなら神のさばきがあると民に語りました。

・ 23：8 主にすがり続けること

そして、8節「ただ、今日までしてきたように、あなたがたの神、主にすがらなければならない。」と、主にすがり続けていくことを語ります。これまでも神にすがって神に信頼を置いて歩んで来たように、これからも、私はもう間もなく死ぬけれど、その後、あなたたちは同じように主に信頼を置いて歩んで行かなければいけないうと云うのです。

・ 23：11 主を愛すること

そして、四つ目は11節にあるように、主を愛することを忘れてはならないと言います。「あなたがたは、十分に気をつけて、あなたがたの神、主を愛しなさい。」と。

・ 23：14～ 主の約束は必ず成就すること

最後に、14節から見えていくと、主が約束されたすべての良いことがことごとく成就したことが記されています。「見よ。きょう、私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。あなたがたは、心を尽くし、精

神を尽くして知らなければならない。あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束したすべての良いことが一つもたがわなかったことを。それは、一つもたがわず、みな、あなたがたのために実現した。」と。神が約束されたすべての良いことが成就したということは、もし、あなたたちが神に逆らうならば、神が約束された悪いことも、必ず成就するということです。つまり、ヨシユアが言っていることは、神がおっしゃったことは必ずそうなるということですので、そのことを信じなさいというのです。神の約束は必ず成就するのです。主に従えばそこに祝福があるけれど、主に逆らえば必ずそこにさばきがあると、そのことをヨシユアは最後にこの民のリーダーたちに告げるのです。なぜなら、ヨシユアがそのように歩いて来たからです。ヨシユア自身が、今、私たちが見て来たように歩いて来たからです。神を信頼し、神の力に信頼を置いて、主のみこころに従い続けて来た。だから、主はヨシユアを用いたのです。

そして、私たちが教えられること、私たちが驚くこと、そして、感動することは、忠実に主に従ったこのヨシユアを用いてみわざをなさった神に対して、「何とすごい神か！どんなことでもできる神であり、約束を守られる方だ。」と言えることです。それがヨシユアの神であり、それがあなたの神です。何という幸いを私たちはいただいていることでしょうか。

c) パウロのケース

もう一人、私たちはこのローマ書の中で、私たちに「祈りの人になれ」と言ったパウロ自身を見ます。使徒の働き 26章 22節の前半に、パウロの証がこのように記されています。「こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしています。」と。パウロがここで語ったこと、教えたことは、私はすべての人々にイエス・キリストの福音を語り続けて来たが、そのわざは自分自身の力ではなくて、神の助けによって為されたということです。パウロはキリストの使徒として、そして、信仰者として主のみこころに従い続けて来た。しかし、彼は自分のその信仰の歩みに関して、このように私たちに教えてくれるのです。「神の助けによって私は生きた」と。どんなときにも私たちは神の助けをいただき続けて生きることが必要です。

思い出してください。ローマ人への手紙 8章で、私たちは「迫害の目的」を学びました。それは、私たちイエス・キリストを信じる者たち、キリスト者たちが主に似た者として成長するためでした。覚えておられますか？パウロはそのことを教えてくれました。だから、あなたがイエスに従い、そして、忠実に歩み続けることによって、いろいろな困難が生じてきます。恐らく、我々が経験することはパウロたちが経験したような迫害とは異なります。でも、人からいろいろなことを言われて辛くなってしまったり、悲しくなってしまったり、苦しくなってしまうことを経験します。私たちはそのような現実を踏まえて、聖書が教えているように、私たちが日々経験しているそのすべてのことには目的があって、それを通して私たちの信仰が成長していくためです。言い方を変えると、それを通してあなたが益々主イエス・キリストに似た者へ変えられて行くという、その目的をもって神はすべてのことを良しとしてあなたに与えているというのです。

◎なぜ、主に似た者へ変えられる必要があるのか？

(1) その過程を通して神の栄光を現わすことができる

なぜ、我々が主に似た者へ変えられることによって神がお喜びになるのでしょうか？それは皆さんが主に似た者へ変えられることによって、つまり、信仰が成長することによって、その過程を通して、あなたはあなたを変えてくださっている神の栄光を現わしていくからです。あなたを変えてくださっている神のすばらしさを人々に明らかにしていくからです。ですから、このように言えます。「迫害、困難とは、神の栄光を現わすという、私たち信仰者が生かされている目的を果たすための機会である。」と。パウロはそのことを私たちに教えています。

・ IIコリント 4：8-15

コリント人への手紙第二 4章を開いてください。パウロ自身、非常な迫害を経験していました。彼が死と隣り合わせであったということをパウロ自身が告白しています。

4：8 「私たちは、四方八方から苦しめられますが、…」

4：9 「迫害されていますが、…」

4：10 「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、…」

信仰ゆえに、彼は死と隣り合わせだったのです。そんなパウロがこのように言っています。

4：10 「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。」

死と隣り合わせであったパウロに、イエスの助けがあっただけでなく、それが周りに明らかに示されました。

4：11 「私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私

「私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。」

つまり、こういうことです。私たちが神に従って生きていこうとするといろんな困難が出て来ます。信仰ゆえに、いろいろな戦い、問題が出て来ます。でも、あなたがその中であって、主を見上げて主に従って行くときに主が為さることは、あなたの内に働いてあなたを助けることです。パウロはそのことを10節と11節で言っているのです。肉体においてイエスのいのちが明らかにされると言うのです。つまり、そのような困難な中におかれているあなたの内に、悲しみの中にいるあなたの内に、主が生きて働いておられるということが明らかに示されるということです。神はそのようにあなたを用いようとしているのです。

(2) その過程において神の恵みを多くの人に及ぼすことが出来る

4 : 15 「すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現われるようになるためです。」

パウロはこう言っています。「いろいろな困難や迫害を通して私たちの信仰は成長する。そして、信仰が成長するにつれて神の栄光があなたを通して明らかにされていく。」と。そして、その過程において、あなたは神の助けをいただきながら生きて行かなければならないと言うのです。もし、あなたがそのように生きていくなら、信仰が成長し、神のすばらしさがあなたを通して証され、そして、15節にあったように「**恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、**」、あなたのうちに働いておられる生きた神を人々が見て、その神のもとに救いを求めて出て来るということです。彼らが救われるということです。だから、私たちはことばで言うことも大切ですが、信仰を生きなければ意味がないということはそういうことなのです。みことばが教えています。どんなに辛いときも、どんなに悲しいときも、どんなに理不尽と思うときも、どんなときでも、私たちがしっかり主を見上げて主に従って行くときに、主はあなたを助けてくれると。なぜなら、それを通してあなたの信仰は成長し、そして、神はその機会を用いてご自分を明らかにし、人々は生きた神を見て、その神のもとに救いを求めて出て来るからです。このような計画があるとパウロは教えてくれているのです。だから、大切なのです。あなたが日々経験するすべてのことは、このような目的をもって神があなたに与えてくれているのです。神ご自身の臨在を、ご自身のみ力を、ご自身の恵みを、ご自身の救いを人々の前に明らかにするためにです。

(3) それによって救われた人々が神の栄光を現わすようになる

そして最後を見てください。15節の終わりに「**神の栄光が現われるようになるためです。**」とあります。まさに今話したことです。人々があなたのうちに生きて働いておられるイエスを見て、そのイエスを信じ、そして、今度その彼らが神の栄光を現わす者となっていくのです。ですから、この神のすばらしい救いが人々に及んで行くために、神はあなたを用いるのです。ですから、私たちが信仰ゆえに経験する大変な問題を経験するときにしっかり覚えなければいけないことは、神はこの機会を使ってご自身のすばらしさを世に明らかにしようとしておられる、その機会だということです。だから、主に助けを求め続けることが必要なのです。なぜなら、私たちは毎日の生活でいろいろなことを経験する中であって、神に喜ばれることを実践し続けようと思うなら、間違いなく、神からの助けをいただかなければいけません。だから、祈りが必要なのです。「どうしましょう、神さま。このときに何があなたの前に喜ばれるでしょう？」と、そうして、私たちは神の助けをいただきながら歩んでいかなければいけません。

◎神により頼んで生きる

ですから、信仰が成長している人の一つの特徴、信仰的に大人である人の特徴の一つは、次のように言えます。それは「**どんなときでも神により頼んでいる人**」です。そうでなければ、私たちはいろいろなことが起こる度に、神を疑ってしまったり、神の約束を無視してしまったり、神に不平不満を言ってみたりします。残念ながら、これでは私たちの信仰は成長して行きません。先ほど見たように、モーセもそうでした。ヨシュアもそうでした。彼らが学ばなければならなかったことは、「**私の神はどんなことでもできる神だ。全能の神だ。**」ということでした。たとえ、人間的に、求められることが難しいとしても、この神が私とともにいてくださる、この神が導いてくださるのだから、それは可能だという信仰です。

「**強くあれ、雄々しくあれ**」という命令がありました。信仰者であるあなたに対しても同じことが言えます。信仰者の皆さん、今置かれている状況が何であろうと、どんなことを経験していようと、あなたがしなければいけないことは、主にあって強くあることであり、主にあって雄々しくあることです。言い方を変えるなら、どんなときでも主の約束を信じ主に信頼を置いて歩み続けていくことです。このコリント第一、1章でパウロはそのことを告白しています。1 : 9「**ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。**」と。パウロは大変な迫害の中にいたのです。死を覚悟するような出来事があったのです。そのときに、パウロはこのように言うのです。「**これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神によ**

り頼む者となるためでした。」と、神はそのことを教えるためにこのような経験を私に与えてくれたのだと言っているのです。

もしかすると皆さん、あなたに必要なレッスンはこれではないですか？私たちがこのように神に信頼を置いて生きていくことを学ぶために、私たちの力の限界をもうこれでもかというように神によって示されて、それでやっと「神さま、助けてください」と初めて言う、残念ながら、私たちは自分の力に過信している者だからです。なかなか自分の弱さを認めたくないのです。だから、神はあなたを砕いて行かれるのです。自分の力ではどうにもならない出来事が起こる度に、私たちはこの大切なレッスンを学んでいくのです。神の助けが必要だということです。神により頼みながら、この方に信頼を置いて歩み続けていこうということです。

エレミヤは、人間に信頼している者と、神に信頼している者とをこのように言いました。エレミヤ書 17:5-8「主はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。:6 そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。」、このように乾ききった虚しい祝福のない、そのような人生を自分の生活に招くようになると言います。しかし、もし、主を信頼し主を頼みとするのであれば、その者に祝福があるようにと言います。「:7 主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。:8 その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。」と、このような生活が約束されているのです。その「カギ」は何でしょう？自分の力に頼って生きるのか神の力に頼って生きるのかです。だから、我々信仰者は「神さま、あなたがこのように生きなさいと教えてくださったから、そのように生きて行きたいのです。助けてください、神さま。この状況にあって何があなたの前に正しいのかよく分からない。助けてください。知恵をください。どのように対応すればいいのか教えてください。あなたが喜ばれることは何なのか、あなたの栄光を現わすことは何なのか、教えてください。そして、それを実践出来るように助けてください。」と、こうして私たちはありとあらゆる時間に神の助けをいただきながら生きていくのです。そうでなければ、私たちは神の栄光を現わすことはできません。主に信頼を置いて生きていく。皆さん、実は、これは神から与えられた大きな祝福です。

◎神の慰めをいただきながら生きる

コリント第二の7章を開けてください。パウロ自身、心に騒ぐものがありました。コリント教会の人たちのことです。彼らのその霊的未熟さに対してパウロは手紙を送りました。コリント第一の手紙です。彼らがその手紙をどのように受け取ったのか？どのように読み取って、彼らがどのように選択をしたのか？パウロにとって気がかりでした。そして、その気がかりな状態にいるパウロのもとに、テトスが戻って来て、テトスがコリント教会の状態を報告してくれました。その様子がこの7章に記されています。4節にはこのように記されています。「私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。」とこのように告白するパウロです。6節には「しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めてくださいました。」とあります。この「気落ちした者」とは、皆さんの新改訳聖書の欄外をご覧くださいと、そこには「へりくだった者」と別訳が記されています。ですから、このことばは形容詞で、確かに、「へりくだった者、謙遜な」という意味をもっています。しかし、ここでは、このことばは「意気消沈した、しょんぼりした、落ち込んだ」と、そのように精神的な意味をもって使われているのです。

ですから、パウロが言いたかったことは、パウロも我々と同じように、いろいろと気がかりなことがあるとやはり心配するのです。心が動揺するのです。そして、ときには落ち込んでしまいそうになるのです。そこでパウロはその事実を認めた上で「気落ちした者を慰めてくださる神は」と記しています。「慰めてくださる神は」、実は、この動詞は現在形です。パウロが言いたいことは、私たちの神は継続して私たちが慰め続けてくださるお方だということです。だから、敢えて、彼はここで現在形を使うのです。神がどういうお方かをパウロははっきり理解しているのです。確かに、我々はいろんなことを経験して気落ちすることもある、ガッカリしてしまうこともある。でも、私の神は私を慰め続けてくださる神だと言うのです。そして、6節の最後に「私たちが慰めてくださいました。」と書かれています。もうすでに起こったこととして彼は記したのです。つまり、彼は「私はすでに慰められた。」と言っているのです。なぜなら、私の神は継続して慰めをお与えくださる神だから、その方によって、私の気落ちした心は励まされたと言うのです。これがあなたの神、これが私の神なのです。

あなたが信仰ゆえに経験するすべてのことは、神が敢えてあなたに与えているのです。なぜなら、それを通してあなたの信仰が成長して、そして、成長するその過程を通して神の栄光が現わされていくためです。だから、神はあなたにその機会を与えてくださっているのです。もし、あなたがその中にあっ

て「主よ、私はこの苦しい中であってこの悲しい中で、あなたを見上げて、そして、あなたに喜ばれることをしたいですから助けてください。」と助けを求めるなら、神はその機会を使ってくださって、あなたを慰めてくださり、そして、あなたを通してご自分を示してくださり、そして、人々が私たちのうちに働く主を見て、その主に導かれて、彼ら自身が今度は神の栄光を現わす者となっていくのです。このようなご計画があるのです。どんなときでも我々はこの方の前に出て、この方から慰めを得ることができます。あなたは神によって救われたのです。あなたはこの神の子どもなのです。このような祝福ももうすでに神があなたに与えてくださったのです。

もちろん、神は、いろいろな形で働かれます。第二コリント7章を見て、このケースの場合、神はパウロのところにテトスを遣わし、すばらしい良き知らせで彼の心を励ましてくださったのです。このようなことはありますね。だれかがやって来て、その方の話によって励まされるということ。神は私たちを様々な方法で励ましてくださるのです。主はパウロの心を知り、そして、彼の心を和らげるために介入して下さるお方です。ときに助けを、また、耐える力を与えてくださるお方であることをパウロは知っているのです。

◎問題に耐える力をいただきながら生きる

同じ、第二コリント12：7-10を見ると、神は耐える力を与えてくださることが記されています。「7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。：8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。：9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。：10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」。辛いことがあっても、主は私たちを励ましてくださり、慰めてくださり、その問題に耐える力を与えてくださるのです。すごい神によって私たちは救われたのです。すごい神によってあなたは日々守られているのです。すごい神によってあなたは日々導かれているのです。少なくとも、そのことを感謝出来るはずです。

そして、あなたがそのことを感謝して生きるときに、あなたはこの神ともっと親密にもっと頻りに時間をとりたくて願うはずです。パウロはそのことを教えているのです。強制されてではありません。神の偉大さが分かり神に感謝するから、その方と交わりたいのです。そして、この方と交わるときに、感謝なことに、この方が私たちを導いてくださり、慰めをくださり、助けをくださり、私たちをご自身の栄光のために用いてくれるのです。だから、神の助けが必要なのです。こうして生きてゆきなさい、このように歩んで行きなさいと、そして、神の栄光を現わす器として、私たちは神によって大いに用いられるのです。

日々の歩みにおいて、神の栄光を現わすという大きな責任をいただいた私たち信仰者、日々の歩みにおいて神の助けが必要です。神の力が必要です。そして、神の慰めが必要です。だから、私たちはそれを与えてくださる主に祈り続けていくのです。「祈りの人」としてこの一週間も歩んでください。こんなすばらしい神と、あなたは個人的な交わりがいつでもどんなときに持てるのです。喜びをもって、感謝をもって。